

(熊本県立小国高等) 学校 令和 4 年度 (2022 年度) 学校評価表

1 学校教育目標
教育基本法の理念、及び「令和 4 年度 (2022 年度) 県立中学校・高等学校における教育指導の重点」と本校の三綱領「尚志・勉学・自主」の具現化を図る。基本的人権の尊重に基づき、深い愛情と理解をもって、生徒一人一人の教育的ニーズに応じた最適な指導・支援を行い、徳 (豊かな人間性) ・体 (健康と体力) ・知 (確かな学力) の調和のとれた生きる力を備えた総合的人間力の育成に努める。また、郷土に思いを馳せ、生涯にわたって郷土に誇りを持てる人材に育てる。

2 本年度の重点目標
◎テーマ 『挑戦』 ～やり抜く力・諦めない心～
◎3つの重点
(1) 生徒一人一人の適性、教育的ニーズに応じた指導・支援の実践
(2) スクール・ミッションを踏まえ、次の 10 年に向けた教育の推進
(3) 新学習指導要領 (観点別評価等)、COREハイスクール等の新たな教育活動の実践

3 自己評価総括表						
評価項目		評価の観点	具体的目標	具体的方策	評価	成果と課題
大項目	小項目					
学校経営	安心・安全な学校環境づくり	災害時における生徒の安全確保	防災教育を通して防災意識を高め、災害の危機を理解し自らの安全を確保する行動や日常の備えができるようにする。	定期的に防災だよりを発行し防災への理解と意識を高める。発生日時を予告せずに避難訓練を実施し自主的に判断し行動する力を養う。実際の災害に備えて備蓄物資を学校に保管する。	B	定期的な防災だよりの発行や危険予測力を高める避難訓練を実施し、防災意識が高まった。非常用備蓄物資の提出が学年によりばらつきがあり、育志会総会等で保護者への啓発や教職員の意識を高め、防災対策・防災教育を継続していく。
		保健教育・教育相談体制の充実	思春期の心身の課題に対して、専門的な立場からの学びの機会を設け、望ましい意志決定・行動がとれるようにする。	各学年の実態に応じたストレス対処教育、全校生徒に向けた性教育、薬物乱用防止について専門的立場からの講話を実施する。生徒の心身の不調等について、SCやSSWなどと連携し支援につなげる		A
	開かれた学校づくり	積極的な情報の発信	小国高校の今を伝えるため定期的にホームページを更新するとともに、学期に1回小国高通信を発行する。地元のラジオ放送やケーブルテレビで学校の様子を伝える。	ホームページをデジタル学級日誌の内容をもとに定期的に更新する。小国高通信を作成し、近隣の学校に配付する。地元のメディアに学校の行事等を伝えるため情報を提供する。	B	ホームページの更新について、今年度は20件の更新を行い、内容は修学旅行やフェスティバル、学級日誌の内容をもとにした日々の生活などを取り扱った。また、高校入試や100周年記念式典の連絡等に活用した。一方で、更新の頻度や未更新時期が長期間あったことなどが課題である。
	保護者や地域の方との交流の活性化	学校行事への保護者及び地域の方の参加者を増やす。	育志会役員会やホームページ、地元メディア及び小国高通信を活用して行事の紹介や案内を行う。	B		安心安全メールや小国高通信、地元メディアへの情報提供等によって、学校行事等の地域・保護者への情報発信を行った。

				新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から参加が難しい場合はオンライン配信などにより学校行事の様子を見てもらう。	
--	--	--	--	---	--

評価項目		評価の観点	具体的目標	具体的方策	評価	成果と課題
大項目	小項目					
学校経営	業務改善・働き方改革	勤務環境等の整備	行事の精選、見直し等を検討するとともに、相互信頼に基づいた心身ともに安心感のある職場、休みを取りやすい雰囲気づくりを実現する。	勤務実態調査、学校自己評価、管理職面談等による意見交換を通して適宜改善を図る。また、定時退勤を奨励する日を月に2回設ける。	B	一部の行事の統合を図るなど適宜業務改善に取り組んだ。また定時退勤日を設け働き方改革への意識づけを図った。小規模校ゆえ相互の連携は図りやすく落ち着いた環境ではあるが、一方で職員一人当たりの業務が過多になりがちであるため、今後一層の改善に努めたい。
学力向上	主体的・対話的で深い学びの実現	職員の授業力向上に向けた取組	授業の構成、指示の仕方、ICTの活用等について教科を越えて意見交換をし、学校全体で授業力向上を目指す雰囲気づくりをする。	公開授業週間において職員間で授業見学を行うことにより、授業についての意見交換やアンケートを行う。	A	公開授業週間は職員間でも授業を見学し合う“I-skill week”として、見学した授業に対してアンケートを記入、提出してもらった。アンケートは授業者にも渡し、教科を横断した意見交換をすることができた。特にICTの活用方法について情報交換をすることができた。
		観点別評価方法の確立	各教科で観点別評価を実施するとともに、教科を越えて情報を共有することで、より良い評価方法を確立する。	観点別評価についての職員研修を実施し、情報交換・意見交換の場を作り全職員で観点別評価について理解を深める機会を作る。	B	7月末に観点別評価の校内職員研修を実施した。教科ごとにJamboardを使ってうまくいった点や悩んでいる点を出すことで、現状を整理したり、他教科の様子を知ったりすることができたが、これからも継続して協議を重ねる必要がある。
	家庭学習時間の確保と習慣化	家庭学習に対する意欲向上と習慣化	家庭学習時間調査において、コース別に定めている生徒の目標学習時間到達割合を、60%以上にする。	Google classroomを活用した調査を行い、生徒の家庭学習時間を全職員が毎日閲覧できるようにすることで、生徒への声かけや指導を促進する。	B	今年度はスプレッドシートの様式を改善し、実施した。家庭学習時間調査における生徒の目標学習時間到達割合は76.8%であり、目標を達成できた。ただ、それが学力の定着につながっているかは定かではないので、学習の質の向上も重視した家庭学習の意識を高めさせたい。
キャリア教育(進路指導)	3年間を見通したキャリア教育の推進	個に応じた進路指導の充実	スタディサプリの活用の推進を継続するとともに、1・2学年進学希望者を対象とした講座(OT)を新たに開講する。	進路指導委員会を各学期1回実施し、各学年、各校務分掌における成果や課題を共有するとともに、スタディサプリアや進学OTの効果的な運用を目指す。	B	スタディサプリアについて、今年度より年2回の到達度テストを導入した。また科目によって、年間を通じて授業と連関させた活用も見られた。進学希望者を対象とした講座(OT)についても、国・数・英の3教科において年間を通じて実施できた。一方で、各

						学期1回の進路指導委員会の実施には至らず、日常的な情報共有・交換と各学年の進路検討会を活用した。
		社会へ貢献できる生徒の育成	「キャリアパスポート」を利用した活動を推進し、「小国高校で身につけてほしい力」を意識して生活することができる生徒を増加させる。	キャリアパスポート作成計画に沿って、生徒が学びを記録できるよう、各学年・担任との連携や支援に取り組む。	B	キャリアパスポートの記録・蓄積に関しては、概ね計画に従って進めることができた。また、3学年では「小国高校卒業までに身につけてほしい力」を活かしたホームルーム活動や面接準備を行うことができた。生徒が主体的に振り返り、行動改善に繋げるための取組や個別面談への活用をさらに進めていきたい。
進路目標の実現	教員の進路指導力の向上	生徒や保護者に対して必要な進路情報を提供できる教員の割合を全体の25%にする。	職員の進路指導力向上のために研修機会を提供する。	B	オンラインや校外での各種研修等について、進路指導部の枠を越えて可能な限り分担しているが、参加する職員に偏りがある。一方、新課程における共通テストに関する情報や入試・就職動向等、必要に応じて職員への情報提供や研修の機会を作れた。職員全体の指導力向上に向けて、引き続き取組を工夫したい。	
	3年生全員の進路実現の達成	全職員が関わる進路指導を実践する。	面接指導や小論文指導について、全職員で指導を行う。	A	学年や分掌を越えた全職員の協力の下、一丸となって指導に取り組んだことで、良い成果を得ることができている。個々の生徒に対する丁寧な指導や助言が質の高い進路実現に繋がっている。	

評価項目		評価の観点	具体的目標	具体的方策	評価	成果と課題
大項目	小項目					
生徒指導	基本的な生活習慣の確立	コロナ禍の生活様式とマナー、学校生活の指導の徹底	新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から生活様式やコロナ禍の社会生活に伴って、差別を許さない姿勢や基本的な生活習慣について指導を徹底する。	集会で講話を実施するとともに、学年と連携してコロナ禍での生活様式や差別、基本的な生活習慣の指導を徹底する。	A	コロナウイルスには、誰にでも感染することはあるということを踏まえて、時期や状況に応じた周知をしている。また、保健部と連携し、生徒の生活状況把握や対策を講じている。定期的な感染者は出ているものの大きな感染拡大には至っていない。来年度からの法改正に対応するなど、今後も状況に応じた対策をしていく必要がある。
		予防指導の徹底	特別指導につながる事例や事件、事故などの危機を予測し、声かけや事前指導の機会を定期的に設ける。	生徒指導部を中心に登校指導を実施し、継続的に声かけを行う。生徒の現状に合わせ、長期休暇前や行事前後に内容を厳選し集会で講話等を行う。	B	1月に特別指導が1件発生した。発生した経緯や指導を振り返りつつ、今後の指導や啓発につなげるようにする。校則を定期的に見直すことや各学年、担任と連携しながら事前指導を中心とした取り組みを継続して取り組んでいく。

	交通道德に関する意識の高揚	交通事故・交通違反指導の徹底	重傷に繋がる交通事故「0」 交通違反「0」	交通安全教室を開催し、交通委員が定期的に交通安全について呼びかける。 交通関連情報を職員に周知することで指導の統一を図る。	B	現在のところ今年度の交通事故、交通違反は0件であるが自転車のマナーについて地域の方から注意を受けた。小国警察署の方を講師として招き、交通教室を実施した。最近の交通事情に応じた講話をしていただき、生徒への交通安全への意識向上を促した。また、自転車に乗る際のヘルメット着用が努力義務化となり、生徒の実状や地域と連携した新しいルール作りも今後の課題である。
人権教育の推進	人権教育に対する理解の深化	地域の人権関係行事への参加	小国郷人権啓発フェスティバルに1年生全員が参加する。小国町人権子ども会における教科学習会や人権学習の充実を図る。	フェスティバルに関する事前指導と振り返りを実施し、取組の充実を図る。小国町人権子ども会では教科学習会の取組以外にも熊本県人権子ども集会へ参加するなど取組の充実を図る。	B	小国町人権子ども会における教科学習会は昨年度とほぼ同数実施できたが、延べ参加者数が減少し、課題が残った。小国郷人権啓発フェスティバルに向け1年生全員が人権作文に取り組み、代表生徒が発表を行った。また、熊本県人権子ども集会がオンデマンド配信になったことを受けて、全校生徒で視聴することができた。
		人権教育に取り組む姿勢の捉え直し	教師が自身の姿勢を言葉で表現し発信できるようになる。	人権に関する研修会等に全職員1回以上参加する。人権教育実践報告(レポート)を作成する。校内研修では、レポート等について相互に意見を交換することで人権教育に関する理解を深める。	A	昨年度の反省も踏まえ、今年度は、人権に関する研修会等に諸事情のため急遽参加できなくなった方を除いて、全員1回以上参加することができた。対外的な取り組み及び校内研修を通じて、人権教育に関する理解を深めることができた。
	命を大切に する心を育む指導	自尊感情と自己有用感を高める	生徒に命の大切さを再認識させ、自身の大切さと役割に気づかせる。	命の大切さを学ぶ教室やスクールカウンセラー講話、体育大会、小国高校フェスティバル等の諸活動を通じて生徒に様々な体験を行わせる。実践毎にアンケートやポートフォリオ等を活用し、自身を見つめ直す機会を持ち、自信に繋げる。	A	命の大切さを学ぶ教室において、事件に巻き込まれたご遺族の話を親身に聴くことと「大切な命を守る」作文コンクールに全校生徒が取り組むことを通じて、生徒自身が命の大切さを再認識させる取組にできた。

評価項目		評価の観点	具体的目標	具体的方策	評価	成果と課題
大項目	小項目					
いじめの防止等	いじめの未然防止	人権意識を高め、自身の行動がどのような影響を及ぼすかといった想像力を育む	いじめる側についての問題、集団の中に属する生徒についての問題、人の痛みがわかるようになること等について生徒に理解させる。	人権教育 LHR を計画的に実施する。人権週間に合わせた人権朝読書を行い、人権作文、標語を作成する。人権係を中心として、クラスへの呼びかけを充実させる。	A	例年の取組に加えて、今年度は人権係が主体となって創立100周年にちなんで全校生徒から募集した人権標語を100点選出し展示したり、12月には「虹の絵」を各クラスで作成したりと、学校全体で人権意識を高める取り組みができた。
	いじめの早期発見といじめ事案への対応	アンケート調査の実施と事後対応	いじめ事案については解消率100%を達成する。	各学期1回いじめアンケート(心のアンケート)を実施する。いじめ事案が発生した場合、速やかに対応する。	B	計画通り学期1回の実施ができた。いじめ事案に対し、早期の解決に向け組織的に取り組むことで、解消率100%を達成できた。アンケート集約の際に1学期課題が出たが、2学期以降は修正し、改善に繋げることができた。
地域連携(コミュニティ・スクールなど)	地域協働活動の推進	総合的な探究の時間の活用	地元のことを学び、考え、伝えるための「小国郷を知る」講座に加えて、COREハイスクール・ネットワーク構想において他地域の高校と連携した課題解決型の学習活動を行う。	地域の魅力を引き出し、課題を解決するための具体的方策を両町役場等と連携して提案する。また、2年生では、県外を含めた他地域の生徒と意見交換を重ね、探究活動の深化を図る。	A	1学年では地元に関するテーマを設定し、課題研究を行う中で、外部の方と連携したり、COREハイスクール・ネットワーク構想で繋がる3校の生徒にアンケートを取ったりするなど、積極的に取り組んだ。2学年では、県外等の他地域の生徒と意見交換を行うことで、探究に新たな視点を入れ、コミュニケーション能力の向上にも努めた。
		地域団体との協働活動の実践	ボランティア活動に積極的に参加する。高齢者支援や障がい者支援など、地域で必要とされている活動に全校生徒の8割以上が取り組む。	両町の社会福祉協議会等と連携して、高齢者支援や障がい者支援、子育て支援、美化活動などに参加し福祉活動に対する生徒の理解を深め、積極的に携わる姿勢を育てる。	B	SDGs美化活動、災害ボランティア体験、子どもデイボランティア、小中学校生への学習支援、手話等、参加者延べ数は129名で延べ数としては全校生徒の約86%を達成。コロナ禍による制約が様々にある中で数字であることを考えると総じて良好な参加状況であったと言える。
	学校運営協議会制度の充実	学校運営協議会の支援による特色ある学校づくり	本校に対する要望等を聴取し、本校の役割を明確にして地域からの信頼と相互理解に基づく関係を構築する。	学校運営及び地域貢献に生かすために、学校運営協議会だけでなく、授業参観や学校行事においても委員を中心とした地域の方と意見交換を行う。	B	授業参観に伴う意見交換や、指定を受けているCOREハイスクール事業に係る探究活動の生徒の受け入れ、それに伴う助言など、学校運営協議会委員に様々な形で支援を受け、地域とともにある学校づくりに資した。

中高一貫教育の推進	中高一貫教育の充実	三校合同の交流活動の充実(生徒交流)	第2回中高一貫三校合同研修会における生徒交流のアンケート項目について肯定的な評価を80%以上にする。	コロナ禍でリモートを活用した三校の生徒同士が交流する場を設定する。	B	リモートで生徒交流を行う計画案まではあがったものの、実施までは至らなかった。体験入学において中学3年生と高校生との交流の場としてグループワークを実施することができ、協働して地域課題について考えられた。今後の生徒交流の在り方を検討していきたい。
COREハイスクール・ネットワーク事業	くまもと夢への架け橋ネットワーク構想の推進	各構成校、教育センター、地域との連携・協働実践	主体的、探究的に学ぶ姿勢や能力を身につけるとともに、進路実現に向けた学力、教養を養成する。	ICTを活用した遠隔授業、地域の教育資源を活用した探究的な学びを、構成校と協力しながら円滑に実践する。	A	担当者間で連絡を密に取り、生徒にとって有意義な取組となった。特に遠隔授業では、リモートで他校生と交流し、切磋琢磨しながら学習することで学習意欲の向上につながった。

4 学校関係者評価

○全体的にバランスの取れた良い教育活動を行えている。計画に沿った学校運営が適切に実践されている印象を持っている。

○進路指導については、昨年度に引き続き過去最高の素晴らしい結果を残した。生徒、教職員、保護者の努力の結晶だと思う。今後、卒業後地元に残る生徒や、進学であっても将来地元に戻り地域貢献を考える生徒をぜひ育てて欲しい。

○COREハイスクール・ネットワーク構想による遠隔授業の取組は大変素晴らしい。過疎化が進む地域でも都市部と同じ学びができることや他校の生徒から刺激を受けて学びを深められるなど、大きな成果が期待できる。

○命を大切にすることを育む教育について、今年は犯罪被害者の方による講演会を実施し、生徒にも大変よい学びの機会となった。今後は社会福祉協議会等、地域の関係機関と連携した取組を行ってもよい。

○コロナ禍の中、ICTの推進など、新しい時代に合わせた教育・学校運営は大変だと思うが、地域と一体となって生徒たちの教育と成長の支援をお願いしたい。

○部活動については、コロナ禍で様々な制約がある中、大変よく頑張っていると思う。

○生徒は、充実した学校生活を楽しく過ごしていることが伺える。地元地域から小国高校に進学したいと思う中学生がより増えれば良いと思う。

○常に情報発信を行い、継続していくことが大切だと思う。地元広報誌や地域のFMラジオ、ケーブルテレビの番組など地域への発信も続けて欲しい。

5 総合評価

○新型コロナウイルス感染症の影響により、教育活動に制約がある中、教育目標の達成に向けて真摯に取り組んだ。自己評価総括表では評価がAとBの項目が多く、また学校運営協議会委員の方々からも全体的に高い評価をいただき、概ね目標を達成できたと思う。

○本校の魅力を発信するため、地域のFMラジオやケーブルテレビ局の協力を得て、広報活動に力を入れた。定期的に番組が放送され、本校の情報と魅力を発信することができ、地域の方から肯定的な評価をいただいている。また、学校ホームページのリニューアルを行い、特に中学生向けコンテンツの充実を図ることができた。

○進路指導では、国公立大学進学者数が昨年度に引き続き過去最高を記録し、就職についても、ほぼ全員の進路決定を達成するなど、生徒の希望及び保護者の期待に応えることができたように思う。

○生徒指導では、地元の警察署の協力を得て交通安全教室を開催するなど、交通指導に力を入れた。交通事故及び交通違反は0件で、目標を達成することができた。また、薬物乱用防止に係る講演も地元の警察署との連携で実施し、薬物の危険性に係る啓発を図ることができた。

○学校評価アンケートの結果から、本校に対する生徒及び保護者の評価は高く、期待されていることを感じる。今年度迎えた創立100周年を機に、教育活動の更なる充実を図り、本校の存在価値を高める取組を引き続き行う。

6 次年度への課題・改善方策

○今年度創立100周年を迎えたが、その関連行事等を通して地域や同窓会の方々と様々に連携する場面があった。地域に根ざした、地元から期待される高校であり続けるために、今後も地域と連携した取組を継続、発展させて本校の更なる魅力化を図りたい。特に総合的な探究の時間の地域課題研究等の更なる充実を目指していきたい。

○創立100周年記念式典は特例だが、それ以外の行事に関しても10月～11月頃に集中していた印象がある。各学年・各部で適切な時期での実施や行事の精選を行った上で、次年度に向けた調整に活かしたい。

○学校の魅力、情報発信については鋭意取り組んでいるが、地域からは更なる発信を期待する声も聞かれる。現在の取組を更に充実させるとともに、新たな工夫ができないか考えていきたい。

○各校務分掌で、ICT支援員の積極的な活用による業務のICT化と効率化とを検討していきたい。

○ボランティア活動については、新型コロナウイルス感染症感染拡大予防のため活動が制限されたが、来年度は生徒の興味関心がある分野での参加ができるよう関係機関と連携を取って積極的に案内等の情報を発信する。

○中高一貫教育については、コロナ禍で思うように活動ができない場面もあったが、来年度の取組が充実するように準備をしていきたい。